



写真 24 フースイ石(宇宿集落大瀬地区)



写真 25 宇宿トフル墓(宇宿集落宇宿地区)



写真 26 泉家住宅(宇宿集落宇宿地区)



写真 27 宇宿神社(宇宿集落宇宿地区)



写真 28 城間トフル墓群(城間集落)



写真 29 共同墓地(城間集落)



写真 30 ノ口墓(須野集落)



写真 31 フ一石(須野集落)



写真 32 土盛子だき石(土盛集落)



写真 33 喜子川遺跡(土盛集落)



写真 34 ミキモリ(土盛集落)



写真 35 宇宿稻すり節(宇宿小学校)

## 第2節 文化財指定に至る経緯・経過

### 1 史跡指定の経緯・経過

宇宿貝塚は、昭和8年（1933）12月17日に京都帝国大学（現・京都大学）の三宅宗悦によって発見され、「宇宿フカミチ貝塚」として報告された。宇宿集落から笠利に通る県道の開削によって、貝塚の中央部が約3mの深さで切られて貝層が露出しており、土層断面からは砂層や遺物包含層が確認された。これが宇宿貝塚の発見である。12月20日から数日かけて試掘調査が三宅によって実施され、貝殻や獸骨、魚骨等の自然遺物の他、複数型式の土器、石器等の人工遺物が出土している。

奄美群島日本復帰後の昭和29年（1954）5月20日に南日本新聞社と鹿児島大学が主催した奄美大島学術調査団において、宇宿貝塚の試掘調査が行われた。調査は、河口貞徳（鹿児島県立玉龍高等学校教職員）と林田重幸（鹿児島大学農学部）を主体に松田宝蔵（宇宿小学校校長）、宇宿小学校教職員及び生徒によって実施された。この調査の結果、遺物包含層である黒土層の上部からは、無文の尖底土器の破片、下部からは有文土器を主とした土器が出土し、一部上部と同型式の無文土器も確認されている。この調査で、2種類の土器が層位的に差異があることが認められた。

昭和30年（1955）から昭和32年（1957）にかけて、九学会連合奄美大島共同調査委員会によって、奄美群島の調査が行われた。その中で、第1に南島の先史時代の編年を作り上げる、第2に本州において南九州にまで及ぶ弥生式文化が、はたして南島にまで拡がっているのかを確認するという目的で発掘調査が実施された。調査は、南九州にもっとも近い奄美大島が選ばれた。そして、過去に試掘調査がなされており、遺物包含層が非常に厚いことから層位関係を明確に把握できると考えられる宇宿貝塚が調査地として選定され、本格的な学術調査が行われた。

発掘調査は、宇宿貝塚が位置する古砂丘上に3箇所のトレンチを設定し、昭和30年（1955）7月20日から8月10日にかけて行われた。調査は、国分直一（水産講習所助教授）と河口貞徳、曾野寿彦（東

発掘調査	年度	調査期間	調査主体	調査箇所	備考
試掘調査	昭和8	昭和8年（1933） 12月20日	三宅宗悦	1箇所	宇宿貝塚の発見 (昭和8年12月17日)
試掘調査	昭和29	昭和29（1954） 5月20日	奄美大島学術調査 団（南日本新聞 社・鹿児島大学）	1箇所	
学術調査	昭和 30	昭和30（1955） 7月20日 ～8月10日	九学会連合奄美大 島共同調査委員会	3箇所	
範囲確認調査	昭和 53	昭和53（1978） 8月3日 ～8月23日	笠利町教育委員会	3地点	国指定に伴う発掘調査
史跡整備に 伴う発掘調査	平成5 ～8年	平成5年（1993） ～平成8年（1996）	笠利町教育委員会	覆屋内	

表13 宇宿貝塚の発掘調査一覧

京大学講師), 野口義磨(国立博物館員)が主体となり, 松田宝蔵(宇宿小学校校長), 花井英親(地主), 松江忠茂(南海日日記者), 地元有志, 笠利村, 大島高校教職員及び生徒の援助を受けて実施された。調査の結果, 上層から無文の土器群(宇宿上層式土器)が出土し, 下層から有文の土器群(宇宿下層式土器)が出土した。また, 宇宿下層式土器の年代が, 縄文時代後期に位置づけられる事実も確認され, 奄美の土器編年研究が大きく飛躍したのである。

昭和45年(1970)には, 文化庁の委嘱によって, 重要遺跡の緊急指定資料の調査を目的として, 宇宿貝塚の現地調査が行われた。その際, 宇宿貝塚には, 県道に隣接する部分に記念の石碑が建てられていたが, この部分から畠への通路が掘削され, 遺物包含層が露呈し, 土器片・貝殻等が地表に散布している状態であったという。九学会連合奄美大島共同調査委員会が行った発掘調査後, 宇宿貝塚への関心が高まり, 昭和47年(1972)に宇宿郷友会も宇宿貝塚の石碑を建立している。

これらの発掘調査によって, 宇宿貝塚の史跡指定への動きがみられ, 昭和53年(1978)に笠利町教育委員会が国及び県の補助事業として, 国指定に伴う発掘調査を行うことになった。発掘調査は, 遺跡の性格と範囲を明らかにすることを目的に, 昭和53年(1978)8月3日~8月23日まで実施された。調査には, 河口貞徳(鹿児島県文化財審議委員)を主体に, 調査員として出口浩(鹿児島県文化課研究員)と本田道輝(加世田女子高等学校教職員), 調査補助員として中山清美(奄美考古学会員)や里山勇広(奄美考古学会員), 牧野哲郎(測量技師)が携わった。

その結果, 遺構や遺物の出土状況から宇宿貝塚の場所で定住化が進み, 集落が形成されはじめたことが明らかになった。また, 宇宿下層式土器の中心となる一群が主体の縄文時代後期の頃には, 南九州の市来式土器やその影響を受けて作られた土器等も出土しており, 南九州地域との交流もあったと考えられる。この他, 成人女性と幼児の人骨が出土した母子埋葬遺構も確認されている。

以上の調査成果から, 宇宿貝塚が, 奄美群島の縄文時代の土器編年研究の基礎となった上, 豊富な遺構・遺物が確認でき, 縄文時代前期頃から主体となる縄文時代後期及び晩期の生活文化を解明する重要な遺跡であると評価され, 昭和61年(1986)10月7日, 奄美群島で初の国史跡指定を受けた。

	発行者	発行年	報告書名
1	九学会連合奄美大島共同調査委員会	昭和34(1959)	国分直一・河口貞徳・曾野寿彦・野口義磨・原口正三 1959「奄美大島の先史時代」九学会連合奄美大島共同調査委員会(編)『奄美-自然と文化』日本学術振興会
2	笠利町教育委員会	昭和54(1979)	鹿児島県笠利町教育委員会 1979『宇宿貝塚』鹿児島県笠利町教育委員会
3	笠利町教育委員会	平成7(1995)	笠利町教育委員会 1995『宇宿貝塚発掘写真集』笠利町歴史民俗資料館
4	笠利町教育委員会	平成8(1996)	笠利町教育委員会 1995『宇宿貝塚発掘写真集(No.2)』笠利町歴史民俗資料館
5	笠利町教育委員会	平成9(1997)	笠利町教育委員会(編) 1997『宇宿貝塚出土人骨編』笠利町文化財報告第23集 笠利町教育委員会
6	笠利町教育委員会	平成13(2001)	笠利町教育委員会 2001「『宇宿貝塚』ふるさと歴史の広場整備事業報告書」笠利町教育委員会

表14 宇宿貝塚の発掘調査報告書等一覧

## 2 指定の状況

### ①指定告示

昭和 61 年 10 月 7 日 火曜日 官 報

○ 文部省告示第百四十一号	文化財保護法(昭和二十五年法律第二百十四号)第六十九条第一項の規定により、次に掲げる
記念物を史跡に指定する。	昭和六十年十月七日
宇宿貝塚	所在地
宇島鹿宿郡兒島大利県籠町大	文部大臣 塩川正十郎
ノ二一二ノ二 一三番三一二 〇ノ〇九 二八二一二八 三番一ノ〇 〇二三一〇二 番三〇、番三 ノ一七二ノ〇 二〇番三三〇 二番〇、番	地城

### ②指定説明文

本遺跡は、奄美大島北端に位置する笠利半島中央東海岸砂丘地の内縁に所在する。貝塚のある砂丘は標高 13m ほどの小丘陵であって、本遺跡はこの丘陵上に南北 100m・東西 60m の範囲にまたがっている。本遺跡は、昭和 8 年 (1933) に発見され、その後昭和 29 年に奄美大島学術調査団、昭和 30 年に九学会連合奄美大島共同調査委員会、昭和 45 年 (1970) と 53 年 (1978) に笠利町により調査が実施された。その結果、本遺跡は南島の先史時代を考える上できわめて重要な遺跡として、特に九州本土とのつながりが明らかにされて、学界の注目するところとなった。

本遺跡の文化層は 8 層に分かれ、最下層である第 8 層は縄文時代前期～中期 (貝殻条痕文土器等) に第 7 層は縄文時代後期 (宇宿下層式土器) に、第 6 層は縄文時代晚期 (宇宿上層式土器) に、第 3・4 層は平安時代末～鎌倉時代 (カムイヤキ等) に比定されている。検出された主な遺構は、貯蔵穴、集石、竪穴住居跡、土坑墓、溝等である。

貯蔵穴は第 7 層で検出されたもので、長径 60cm・短径 50cm・深さ 40cm ほどの平面が楕円形の袋状ピットであり、4 個確認されている。集石も第 7 層で検出されたもので、経 1 m ほどの円形である。第 6 層で検出された竪穴住居跡は 2 基あり、割石を 1 辺 2.7m 角に並べて区画したもので、中央に炉がある。いずれも内部に多量の礫が堆積していたのが注目される。土壙墓も第 6 層中に設けられたもので、土坑墓は長径 157cm・短径 60cm・深さ 37cm の平面が楕円形の袋状土坑で、中に成人女性と幼児が 1 体ずつ合葬されていた。成人女性には、ガラス製の丸玉 2 点と小玉 40 点、骨製の管玉 4 点からなる首飾りが、幼児には小形の磨製石鏃 1 点が副葬されていた。また幼児の上には

4点の礫が、土壌上面には19点の礫が置かれていた。溝は第3層から切りこまれたもので、幅1.6m・深さ1.3mの規模である。

遺物は、土器、石器、貝器等が出土している。土器類は、多量の南島の土器の他に本土から移入された縄文土器・弥生土器・カムィヤキ・中国産の白磁・青磁・染付等からなるが、南島の土器である宇宿下層式土器と縄文時代後期の市来式土器の共伴が確認されたことは重要である。石器は、打製石斧・磨製石斧、凹石、石皿、砥石、石製垂飾品、ノミ形石器等が、貝器は貝輪、貝製垂飾品、また骨製垂飾品が出土している。この他に自然遺物としては、イモガイ・タカラガイ等の120種の貝類、イノシシ・ウシ等の獣骨、タイ・スズキ科等の魚骨が出土している。

本遺跡の発掘調査によって、奄美大島と本土との交流が長期にわたって継続的に行われたことが跡付けられ、さらにその影響を受けながら南島の先史文化が推移していった状態が明らかにされた。これらの点から、本遺跡は高い学術的価値を有するものであり、史跡に指定してその保存を図ろうとするものである。

名 称	宇宿貝塚	
所 在 地	鹿児島県大島郡笠利町宇宿字大籠	2298番, 2300番ノ1, 2300番ノ3, 2301番ノ1, 2301番ノ2, 2307番, 2308番, 2310番ノ2, 2310番ノ2
種 別	史跡	
指 定 日	昭和61年10月7日（文部省告示第141号）	
指定基準	文化財保護法（昭和25年法律第214号）第69条第1項、指定基準「特別史跡名勝天然記念物及び史跡名勝天然記念物指定基準 史跡1（貝塚）」による。	
管理団体	奄美市	

表15 宇宿貝塚の史跡指定概要

### 第3節 宇宿貝塚の発掘調査

#### 1 遺跡の立地

宇宿貝塚は、奄美大島北端の奄美市笠利町宇宿に位置する。笠利町の東海岸に帯状に伸びる平坦地のほぼ中央、宇宿集落の北側約200mの砂丘上にある。標高は約13mで、発掘調査以前には畠地として利用されていた。

## 2 発掘調査の経過と実施箇所

---

### (1) 九学会連合の発掘調査

昭和 30 年（1955）7 月から 8 月に行われた九学会連合の発掘調査は、南島先史時代の土器編年を確立する目的で実施された。その際、調査対象にふさわしい遺跡の一つとして、九学会連合調査団のメンバーでもあった河口貞徳が昭和 29 年（1954）に試掘調査を行い、複数のタイプの土器の存在をすでに確認していた宇宿貝塚が選ばれた。

発掘調査にあたっては、遺跡を分断するように敷設されている県道の西側に沿って、南北方向に第 1 トレンチ（ $2 \times 5\text{ m}$ ），第 2 トレンチ（ $2 \times 8\text{ m}$ ）を設定。さらに第 1 トレンチの南端から同トレンチに直交する第 3 トレンチ（ $2 \times 8\text{ m}$ ）を設定している。

発掘調査の結果、上層から無文の土器群が大量に出土し、下層からは沈線文や押引文等の文様を有する土器群がまとまって出土した。このような出土状況を踏まえて、上層から出土した在地の無文土器群は「宇宿上層式土器」、下層の有文土器群は「宇宿下層式土器」と名付けられた。さらに、宇宿下層式土器と共に伴して、南九州の縄文時代後期の土器である市来式土器や一湊式土器が出土したことから、宇宿下層式土器が縄文時代後期に比定できた。これらの発見は、奄美大島の土器編年研究を進めるうえで極めて重要な成果であった。なお、宇宿下層式土器については、その後の調査研究により、いくつかの型式に細分化されている。

第 2 トレンチからは、奄美・沖縄諸島特有の堅穴住居跡 1 基が初めて検出された。さらに、第 1 トレンチ南端付近から厚さ 50cm 程度の混貝土層が検出され、食料残滓である貝類（マガキガイ・チヨウセンザザエ等）が多数出土した。そのほかの遺物として、少量の兼久式土器・カムイヤキ・打製石斧・磨製石斧・石皿等の石器類や骨角器・貝製品等も出土した。

### (2) 史跡指定に向けた発掘調査

昭和 53 年（1978），国指定史跡に向けて遺跡の性格と範囲を明らかにする目的で発掘調査が実施されている。調査地点は、九学会連合調査時の区画を含む県道西側丘陵箇所を第 1 地点、県道の東側にある丘陵東端箇所を第 2 地点、丘陵の南西裾に接する低地を第 3 地点としている。

第 1 地点では、地形に合わせて北西-南東ラインと、これに直交する北東-南西ラインにより、 $2 \times 2\text{ m}$  方眼の区画を設定。九学会連合調査時のトレンチに近接する区画群以外に、砂丘中央頂部へと続くラインの区画群、さらには頂部から南東へと下るラインの区画群等合計 21 区画を発掘した。

第 2 地点は、第 1 地点と同じ方位で $2 \times 3\text{ m}$  方眼の区画を設定し、そのうち 8 区画を発掘した。第 3 地点においては、丘陵裾のラインに沿うように 3 箇所のトレンチを設けたが、調査期間の関係で 2 箇所のトレンチ（A と C トレンチ）のみを発掘した。

遺跡の中心をなすのは第 1 地点で、特に砂丘上部から南東の海側に傾斜していく斜面にあたる箇所に遺構や遺物が集中している状況が確認できている。

遺構・遺物は縄文時代後期と縄文時代晚期、そして中世に大別される。中世の遺構、遺物は第 2

～4層が中心で、縄文時代晚期の宇宿上層式土器（調査当時は弥生時代後期と認識されていた）は第5～6層、縄文時代後期の土器群は第7～8層で多く出土する傾向が見られた。全体的に遺物は第6層からの出土量が最も多い。

第2地点は、遺物包含層が一枚で、宇宿上層式土器と縄文時代後期の土器が混在して出土。遺構は確認されていない。

第3地点では、宇宿上層式土器を主体とする層から 56cm×53cm の隅丸方形形状の炉跡が1基確認された。両地点とも、遺物量は第1地点に比べ少量にとどまった。

縄文時代の遺構としては、九学会連合調査時に見つかった竪穴住居跡に続き、新たにもう1基の竪穴住居跡が同じ第6層から確認されたほか、第7層からは貯蔵穴と考えられる土坑群等が見つかった。また、第1地点の西端付近では、母子とみられる2体の人骨が合葬された土坑墓1基が確認された。昭和53年（1978）の発掘調査報告書では、同土坑墓を宇宿上層式土器と同じく弥生時代後期と位置づけている。そのほか、中世の遺構として、断面がV字状を呈する溝状遺構が確認され、覆土から主にカムィヤキ・青磁片等が出土した。

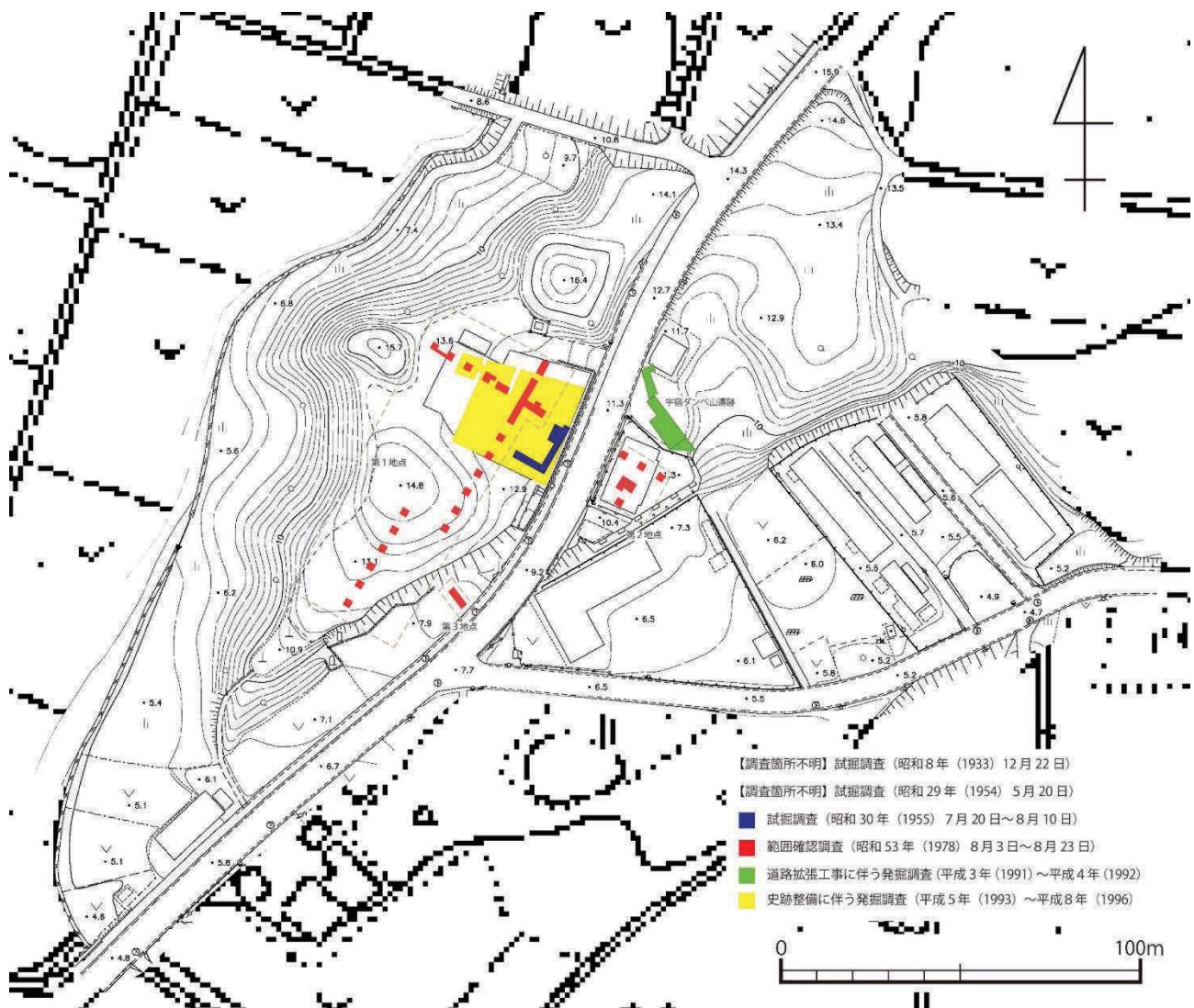


図 18 宇宿貝塚の発掘調査箇所

### (3) 史跡整備に伴う発掘調査

昭和 61 年（1986）10 月に宇宿貝塚が国史跡として指定されたのを受け、平成 5 年（1993）から平成 9 年（1997）まで、史跡整備に伴う発掘調査が実施された。

発掘調査箇所は、現在、覆屋及びガイダンス施設が立地する範囲にほぼ限定された。中世の層からの遺構・遺物の出土量がかなり多く、調査日数を要したため、宇宿上層式土器が含まれる包含層を検出した時点で発掘調査を終了している。今後、発掘調査報告を行っていく必要がある。

### (4) 県道拡幅工事に伴う発掘調査

昭和 63 年（1988）に現在の奄美空港が開港し、それに伴って各地で道路拡幅工事が行われるようになった。国史跡となった宇宿貝塚に隣接する県道も対象になり、拡幅工事が計画された。しかし、史跡範囲内での拡幅工事ができないため、宇宿貝塚と同一砂丘上で東端に位置するダンベ山側に拡幅することとなった。この際、警察官舎（現、定住促進住宅）を移動する必要があり、これに伴い平成 3 年度から平成 4 年度に発掘



写真 36 葦石遺構検出状況(宇宿ダンベ山遺跡)

調査が実施され、「宇宿ダンベ山遺跡」が調査された。

この調査では、ダンベ山を囲むようにして造成された葦石遺構と中世の埋葬墓 2 基が確認されている。葦石遺構の機能については不明だが、葦石には、宇宿貝塚で確認される敲石や磨石等の石器類が転用されている。

埋葬墓は、周辺から青磁が出土した第 1 号墓と、板状に加工したビーチロックを蓋石としてかぶせた第 2 号墓が検出された。

## 3 遺跡の変遷

宇宿貝塚は、縄文時代および中世の文化層が確認された複合遺跡である。

縄文時代については、縄文時代前期の土器も少量ながら出土しているものの、遺構や遺物が集中するのは縄文時代後期と縄文時代晚期である。縄文時代後期の貯蔵穴・集石、縄文時代晚期の竪穴住居跡等、当時の生活がうかがえる良好な資料が得られている。

弥生時代並行期から古代までの遺構は検出されていない。遺物についても古代の兼久式土器等が少量出土している程度である。

中世の文化層からは、特殊な埋葬形態を有する土坑墓や、類例の少ない断面が V 字状を呈する溝

状遺構等が検出された。当遺跡に隣接するダンベ山遺跡も、丘裾部に葺石を伴う中世の埋葬遺跡であることから、当時、当遺跡周辺のエリアが、墓域として利用されていた可能性が考えられる。

## 4 縄文時代の発掘調査成果

### (1) 遺構

#### 【竪穴住居跡】

九学会連合調査時に、石組みの竪穴住居跡が1基確認された。この遺構の検出は、当遺跡が初となる。さらに昭和53年（1978）の調査では、同様の竪穴住居跡がもう1基確認された。いずれの住居も宇宿上層式土器が主体となる層から掘り込まれており、住居覆土中の土器も宇宿上層式土器が主である。

昭和30年（1955）の調査で確認された竪穴住居（以下、1号住居）は、砂丘頂部から海へ向け

てゆるやかに傾斜する斜面の低いところに築かれていた。長軸2.3m、短軸2mの方形を呈する。長軸は南北方向である。床面までの深さは約30cmで、床面の中央からやや南寄りに地床炉1基が確認された。住居の北東隅にも焼土が集中しており、炉として使用された可能性がある。床面及び住居周辺から柱穴は確認されていない。なお、住居内の北西隅あたりから炭化したシイの実が多く検出された。

昭和53年（1978）の調査で確認された竪穴住居（以下、2号住居）は、1号住居の北西側約10mのところに位置する。2号住居の方が斜面のやや上側に当たる。長軸は1号住居と直交するよう東西方向に取り、東西約2.7m、南北約2mの方形を呈する。炭化物は多量に確認されているが、明確に炉跡とみられるものは確認されていない。

なお、2号住居の数m北西側のI—7区・第6層から、検出部分の1辺が1m程度、深さ約30cmで方形を呈する可能性のある遺構の一部が確認された。未発掘箇所にも広がるため、ある程度の規模を持つ遺構とみられる。掘り下げた壁面近くに大きめの礫が集中していることから、竪穴住居跡の一部分の可能性も考えられる。

#### 【集石遺構】

昭和53年（1978）の発掘調査で、2号住居直下の第7層から半径1.5～2m程度の半円形の集石遺構が検出された。未発掘箇所を含めると、ほぼ円形に広がっていたとみられる。中央部がややくぼみ、木炭片も多く見られた。礫間からは市来式土器と面縄東洞式土器が共伴して出土したほか、



写真37 宇宿貝塚の竪穴住居跡

男根状の石製品も 1 点確認されている。なお、昭和 53 年（1978）の発掘調査報告書では、3 点の土器がまとめて置かれている状況等から、敷石住居の可能性もあるとしている。

#### 【貯蔵穴】

1, 2 号住居の中間エリアから、第 7 層上面において、縄文時代後期のものとみられる土坑 4 基（1～4 号ピット）が、互いに近接して見つかった。ごく浅い 1 号ピットを除き、いずれも底面に向けて袋状に広がる形状を呈しており、貯蔵穴の可能性が考えられる。大きさは、1 号ピットは上部径が 65×50cm で深さ 15cm, 2 号ピットは上部径 95×65cm で深さ 30cm, 3 号ピットは上部径 90×75cm で深さ 60cm, 4 号ピットは上部径 40×33cm で深さ 40cm である。

このうち 2 号ピットの覆土からはサラサバティ製貝輪、3 号ピットの覆土からは多量のシイの実、獸骨等に加え、縄文時代後期に位置づけられる凹線文土器の破片も確認されている。

#### （2）人工遺物

##### 【土器】

最も出土量が多かったのは宇宿上層式土器で、その下層からは面縄東洞式土器・面縄西洞式土器・嘉徳 II 式土器等、かつて宇宿下層式土器として総称されていた土器群が多く出土した。第 8 層からは当遺跡では最も古手となる縄文時代前期の条痕文土器もわずかながら出土した。

##### 【石器・石製品】

第 6 層を中心打製石斧・磨製石斧・石皿・磨石・有溝砥石等が出土した。第 7 層最上部からは、重量 1.5kg 前後の大型磨製石斧が 2 本密着した状態でみつかった。そのほか、黒曜石の剥片やチャート残核が出土した。平成 5 年（1993）から平成 9 年（1997）の発掘調査では、縄文時代後期から縄文時代晚期頃とみられる黒曜石製スクレーパーやチャート製石鏃も確認されている。石製品としては、前述のとおり、縄文時代後期の集石遺構から男根状の石製品が 1 点出土した。

##### 【貝製品】

管状棘の先端を鋭利に研磨したスイジガイ製利器やヤコウガイの体層部を利用した貝匙状製品等が出土した。そのほか、敲打器として用いられたと考えられる剥離痕のあるヤコウガイの蓋が多く見つかっている。装飾品としては貝輪・貝小玉・ツノガイを管玉状に加工した垂飾品等が出土した。

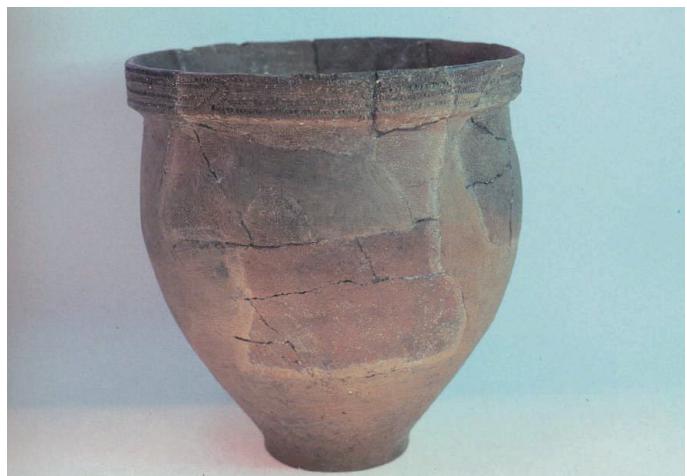


写真 38 面縄東洞式土器と市来式土器の折衷型



写真 39 貝輪

## 【骨製品】

かんざし状製品のほか、第5層最下部からは、ヤコウガイの中に入れられた状態の漁骨製垂飾品1点が出土した。そのほか直径2cm程度の薄い円柱状に加工された骨製品1点等が出土した。また、本土からの持ち込みとみられる鹿角の断片が1点出土した。丸い穿孔が1箇所認められることから、なんらかの製品であった可能性が考えられる。



写真40 骨製品

### (3) 宇宿上層式・下層式土器の評価

すでに述べたように、昭和30年（1955）の九学会連合による発掘調査の際、宇宿貝塚の上層から無文系土器群が多く出土し、下層から有文系土器群が多く出土する状況が確認されたことにより、両土器群が時期差を持つものとして認められ、それぞれ、宇宿上層式土器、宇宿下層式土器と名付けられた。さらに宇宿下層式土器とともに、すでに年代が判明していた縄文時代後期に位置づけられる南九州の市来式土器等が見つかったことから、宇宿下層式土器が縄文時代後期を中心としたものであることも明らかとなった。

同調査時点で、宇宿下層式土器がいくつかの異なる型式を含むことは予見されていたが、その後の各地の遺跡の調査結果を踏まえて実際に細分化されていった。細分化された土器型式には面縄東洞式、面縄西洞式、嘉徳IA式、嘉徳IB式、嘉徳II式等があり、ほとんどが縄文時代後期に位置付けられている。それぞれ新たな型式名が設定されたのを受け、宇宿下層式土器という型式名は実質用いられなくなった。

一方、宇宿上層式土器としてまとめられた土器群も、実際には有文系等いくつかのタイプを含むことは、九学会連合調査時から認識されていた。宇宿下層式土器同様に、細分化の可能性についてもこれまでたびたび言及されてきたが、いまだなされていない状況にある。

宇宿上層式土器の年代観についてみると、奄美の土器編年研究を主導してきた河口貞徳は、論文



写真41 宇宿下層式土器



写真42 宇宿上層式土器

「奄美における土器文化の編年について」（1974年）において、宇宿上層式b（有文系）がa（無文系）に先行するとしたうえで、宇宿上層式土器を弥生時代中期に位置付けた。昭和53年（1978）の発掘調査報告書では弥生時代後期としている。しかし、タチバナ遺跡（中之島）等、発掘調査事例の増加を得て、1990年代以降は、宇宿上層式土器が縄文時代晩期まで遡ることが広く認められてきている。ただし、その存続幅については、いまだ共通の理解を得ているとは言えない。

標式遺跡である宇宿貝塚において宇宿上層式土器として総称されたものには、のちに型式設定された仲原式土器等も一部含まれているのが実態で、そのことが研究者の年代観に影響を与えてきた可能性もあると考えられる。どこまでを宇宿上層式土器の範疇に含めるべきか、改めて検討すべきである。

#### （4）自然遺物

陸産獣骨ではリュウキュウイノシシの骨が多数を占めている。また、中世の層からはウシの骨も出土している。海産獣骨ではウミガメが主体をなす。貝類は、ヤコウガイ・チョウセンサザエ・マガキガイ・アマオブネ等を中心に多くの種類が確認された。魚骨はブダイ科が中心で、昭和30年（1955）の発掘調査では、体長1mに達するものも多く出土している。なお、シイ以外の植物遺体についての詳細な分類は行われていない。

#### （5）遺跡の特徴

宇宿貝塚の縄文時代の特徴としては、縄文時代後期および縄文時代晩期における生活の様子がうかがえる点があげられる。縄文時代後期においては、こぶし大の石を集めた遺構が1基検出されている。昭和53年（1978）の発掘調査報告書では、これを敷石住居と推定しているが、木炭片を含む石群が円形に広がり、中央がくぼんでいる状況から、一般に蒸し焼き調理施設とされる集石遺構である可能性も否定できない。また、袋状を呈する貯蔵穴が4基検出されており、内部から炭化したシイの実が確認されたことも、当時の食文化を理解するうえで重要な発見といえる。

縄文時代晩期の遺構としては、竪穴住居跡が少なくとも2基確認されており、縄文時代後期に引き続きこの地が居住の場とされていたことがわかる。近隣の砂丘上に位置する宇宿小学校遺跡でも同時期の竪穴住居跡が少なくとも7基確認されており、当時、このあたりの砂丘上が、居住に適した場所として選定されていたことがうかがえる。住居内から炭化したシイの実が多く確認されたことも重要である。

### 5 中世の発掘調査成果

---

#### （1）遺構

##### 【土坑墓】

平成5年（1993）から平成9年（1997）の発掘調査時にカムイヤキを副葬品とする幼児墓1基、副